1946年11月26日第三種郵便物認可
2018年1月1日発行（通巻993号）

［別冊付録］
山の便利帳
2018

読者全員に
デジタル版を
プレゼント

山と渓谷

2018
January
1

［第2特集］
登山者のための
ブックガイド2018

登る喜びをさらに深めてくれる山岳図書
山と本をよく知る選者が薦める名著、話題作

紀行・ルポ…先駆者の足跡
ノンフィクション…登山家たちの情熱
エッセイ…山に登る喜び
山岳小説…山をめぐるドラマ

［特別ルポ］
水の国わかやま
古座川と大塔山を歩く

［対談］
2週間耐え抜いた、
山岳遭難からの生還

特集
縦走、花、岩稜、バリエーション…
今年歩きたい
ベストルート100

from MtSN

自然再生活動

伝統のチマキザサを支えるトレイルランナーの活動

古くからチマキザサの産地として知られてきた、京都市北部・左京区の花脊地区。そのチマキザサが近年、シカの食害で絶滅の危機に瀕している。京都の伝統文化にも深く関わるチマキザサの再生活動に、地元のトレイルランナーたちが協力している。

千葉弓子＝取材・文・写真

作業のため花脊のトレイルへ向かう東口さん、藤井さん、Kyoto Woodsのメンバー

京都市左京区の北部にある花脊（はなせ）。一説では、花の都京都の背の部分に位置することからこの名がついたといわれている。別所、大布施（おおふせ）、八桝（やます）、原地新田の4つの地区から構成されている花脊一帯では、古くからチマキザサが自生し、地域産業として盛んだった。

チマキザサはイネ科ササ属の常緑多年草で、山間の落葉樹林に多く生えている。高さ1～1・5m、葉の長さは20～30cmとササとしては大型で、本州の日本海側に多く分布する。香りがよく、葉の裏にある「葉毛」が少ないため加工しやすい。日本料理を盛る敷き葉として用いられたり、和菓子や生麩をくるむのに使われたりしてきた。

さらに、京都を象徴する活用法が、祇園祭の粽（ちまき）だ。その昔、スサノオノミコトが旅の途中に一夜の宿を求めたとき、貧しい蘇民将来（そみんしょうらい）の家であたたかなもてなしを受けた。その御礼にと、蘇民将来の子孫を代々、疫病から守ることを約束し、証として茅の輪を腰につけたのが始まりとされている。祇園祭では、八坂神社で祈祷された粽が各鉾町で授与される。京都の家々では疫病災難よけとして、軒先にこの粽を飾る習わしがある。

チマキザサは約60年に一度のサイクルで、一斉に開花して枯死する。花脊における最近の開花時期は2004年から07年だったが、山間地域でシカが急激に増え、多くの新芽が食べられてしまい、生育できなかった。これにより、花脊での採集や市場への出荷は完全にストップし、祇園祭の粽も他県からの代替品に依存しているのが現状だ。

プロジェクトを進める京都大学の東口涼さん（右）と、Kyoto Woodsの中川政寿さん

深い森が広がる花脊の山。かつては林業も盛んだった

このままでは伝統文化を受け継ぐ花脊のチマキザサが絶滅してしまうと、10年から住民や京都市関係部局などが連携して再生活動を開始。13年には京都大学と山鉾町の住民も参加して「チマキザサ再生委員会」が設立された。

トレイルランナーだからクリアできた課題

取材では、再生委員会のメンバーである京都大学大学院農学研究科の東口涼さん、花脊別所自治振興会会長の藤井順一さん、活動に協力しているNPO法人Kyoto Woodsのみなさんに、チマキザサを守る保護柵の設置場所を案内してもらった。

京都に生まれ、小さい頃から祇園祭の囃子方だったという東口さんにとって、チマキザサはずっと身近な存在だ。

「現在、京都市内におけるチマキザサの需要は年間1000万枚といわれています。そのうち数百万枚がこの地区のものでした。1682年の古文書にも、洛北のササは質がよいと記されています」（東口さん）

チマキザサはサハリンの一部にわずかに分布しているが、基本は日本のみに生息する植物。ササ自体が日本特有で、パンダが食べているササは竹のササなのだとか。

トレイルランナーがこの活動に協力するようになったのは、東口さんが開催していた市民セミナーにKyoto Woodsの中川政寿さんが参加したことがきっかけだった。

「もともと花脊のトレイルが好きだったんです。トレイルランナーたちもネットの張り方が上手くなっていった。「最初はよくわからず、たるんで張ったままでも満足していたのですが、いまは確実にスキルアップしています。自分たちが柵を設置した場所に走りに来ると、やはり気になるんですよね。それで自然にチェックするようになりました。たまに猟師さんからシカ肉のお裾分けをいただくこともあるんですよ」と常田さんは話す。こうした活動は、何より無理なく続けられることが大切だと東口さんも言う。

再生活動を重ねることで、山への愛着が増し、地元の人たちとの交流も深まっていく。中川さんにこれからの展望を聞いた。

「もっと柵の数を増やしたいですね。冬には雪でシカ柵が倒れるので、雪解けを見計らってメンテナンスします。自分たちが走らせてもらっている山に対して恩返しできる活動を、これからも続けたいと思います」

MtSN
MOUNTAIN SPORTS NETWORK
from MtSNは、ウェブサイト「マウンテンスポーツネットワーク（MtSN）」の記事から、『山と渓谷』読者にもお薦めしたい記事を要約して掲載します。もっと詳しい記事はMtSN（www.mtsn.jp）をご覧ください。

from MtSN

1 点検の合間、中川さんの淹れコーヒーでひと息つく　2 柵の近くには「チマキザサ再生プロジェクト」の案内板も

柵の中では、チマキザサの新しい葉がしっかりと生育していた

チマキザサを乾燥させたもの。京都では年間1000万枚の需要があるという

祇園祭の「粽」。洛中の家々では軒先に飾り、無病息災を願う

んに、チマキザサを守る保護柵の設置場所を案内してもらった。

京都に生まれ、小さい頃から祇園祭の囃子方だったという東口さんにとって、チマキザサはずっと身近な存在だ。

「現在、京都市内におけるチマキザサの需要は年間1000万枚といわれています。そのうち数百万枚がこの地区のものでした。1682年の古文書にも、洛北のササは質がよいと記されています」（東口さん）

チマキザサはサハリンの一部にわずかに分布しているが、基本は日本のみに生息する植物。ササ自体が日本特有で、パンダが食べているササは竹のササなのだとか。

トレイルランナーがこの活動に協力するようになったのは、東口さんが開催していた市民セミナーにKyoto Woodsの中川政寿さんが参加したことがきっかけだった。

「もともと花脊のトレイルが好きだったんです。トレイルランナーたちもネットの張り方が上手くなっていった。「最初はよくわからず、たるんで張ったままでも満足していたのですが、いまは確実にスキルアップしています。自分たちが柵を設置した場所に走りに来ると、やはり気になるんですよね。それで自然にチェックするようになりました。たまに猟師さんからシカ肉のお裾分けをいただくこともあるんですよ」と常田さんは話す。こうした活動は、何より無理なく続けられることが大切だと東口さんも言う。

再生活動を重ねることで、山への愛着が増し、地元の人たちとの交流も深まっていく。中川さんにこれからの展望を聞いた。

「もっと柵の数を増やしたいですね。冬には雪でシカ柵が倒れるので、雪解けを見計らってメンテナンスします。自分たちが走らせてもらっている山に対して恩返しできる活動を、これからも続けたいと思います」

を通じて環境活動に参加できないかと考えていたとき、この活動を知りました」（中川さん）

まずは広くトレイルランナーに花脊の山の魅力と現状を知ってもらいたいと、中川さんはラン仲間の常田めぐみさん、成田直隆さん、籔聡さん（いずれもKyoto Woods）に声をかけ、花脊エリアでミニレースを企画、開催した。そこに集まったランナーたちがこの問題に興味を抱き、保護柵の設置に協力することになる。

「以前から柵の設置は検討していたのですが、山での作業が重労働であることと、柵のメンテナンスをどうするかが課題で実現できなかったのです」と自治振興会会長の藤井さんは話す。ボランティアを募ったこともあったが、高齢者が多く、作業が難しかったのだという。だがトレイルランナーなら山の斜面に慣れており、広範囲なエリアを走って移動することもできる。専門家に柵の取り付け方を学びながら、トレイルランナーたちが4つの柵を設置していった。

山に愛着が湧き、人々との信頼関係も

「シカはササ以外の植物も食べてしまうので、チマキザサを守ることは他の植物を守ることになり、森の多様性を維持することにもつながります」と東口さん。長年、シカが新芽を食べ続けてしまうと、地下に根を張っている植物の再生力が限界を超え、植物の種類は次第に減っていく。100種類が50種類になり、いずれは30種類へと減少してしまうのだ。

東口さんは他にも10m四方の実験区を設け、観察している。「監視カメラも設置していて、それを見ると、毎日のようにシカが訪れていることがわかります。低い柵だと飛び越えてしまうので、ある程度の高さとしっかりした張り方が重要になってきます」

活動を続けるうち、トレイル